

関係機関長 殿

沖縄県病害虫防除技術センター所長

(公 印 省 略)

病害虫発生予察技術情報について

平成 30 年度病害虫発生予察技術情報第 2 号を発表したので送付します。

平成 30 年度病害虫発生予察技術情報第 2 号

冬春期野菜類におけるミカンキイロアザミウマの防除対策について

平成 30 年(2018 年)2 月に県内の施設栽培キュウリでミカンキイロアザミウマが初確認されました。その後の調査で、その他の野菜類からも発生・定着が確認されました。本種は吸汁による被害だけでなくウイルス病も媒介するので、防除対策を徹底しましょう。

1 形態・生態

- (1) 形態: 雌成虫(図1)は、体長約 1.5mm。体色は明黄色～褐色と変異が大きく、腹部に褐色斑を伴う黄色型もある。低温条件下で褐色型が多くなる。雄成虫は、体長約 1.1mm で明黄色のみ。
- (2) 生態: 卵は葉や花弁などの組織内に1個ずつ産みつけられる。1雌成虫当たりの産卵数は 150～300 個。幼虫は花弁、新葉などに生息し、これらを吸汁加害する。2齢を経過した後、地表に移動し、土中や、落葉中で蛹化する。成虫になると再び花弁、新芽、新葉に移動し、加害する。発育期間は、キクでは 15℃で約 34 日、20℃で約 19 日、25℃で約 12 日及び 30℃で約 9.5 日。成虫の寿命は 37～99 日。発育零点は 9.5℃。
- (3) 寄主植物: 本種の寄主範囲は極めて広く、主な寄主植物は以下のとおりである。下線は沖縄県で寄主が確認された植物。
 - ・野菜類: ピーマン、キュウリ、ヘチマ、イチゴ、アスパラガス、キャベツ、レタス、トマト、メロン、ナス、ホウレンソウなど。
 - ・花き類: キク、カラー、マツバボタン、ガーベラ、バラ、トルコギキョウ、カーネーション、アイリス、シクラメン、インパチェンス、ゼラニウム、ヤグルマソウ、など多数。
 - ・雑草: アワユキセンダングサなど多数。
- (4) 本種による野菜類への直接の被害は成虫及び幼虫の吸汁による被害である。加害されると、葉ではかすり状及び白斑状の食害痕が生じ(図2)、果実では奇形や褐変、退色を引き起こし、商品価値を損ねる。
- (5) 本種はトマト黄化えそウイルス(TSWV)、インパチェンスえそ斑点ウイルス(INSV)及びキク茎えそウイルス(CSNV)の主な媒介虫である。

2 防除対策上注意すべき事項

- (1) 苗を導入する時は本種の寄生や食害痕がないか確認する。育苗時に防虫ネットを張るなどして、寄生のない健全な苗を作る。
- (2) 施設では出入口や側窓を 0.6mm 以下のネット等で被覆し、成虫の侵入を防ぐ。
- (3) 多発すると防除が困難になるので、花や葉への被害が無いかよく観察し、早期発見・防除に努める。
- (4) ほ場周辺の雑草は本種の発生源になるため開花前に除去する。特に、本種は花粉の摂食により増殖力が増すことから、アワユキセンダングサ(図3)などの雑草は開花前に除草する。

- (5) 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避け、散布後には必ず効果を確認する。
- (6) 栽培終了後のほ場が発生源にならないよう、すみやかに残さ処理を行う。
- (7) 本種が発生した施設ほ場では、本種の分散を防ぐため、栽培終了後、蒸し込み処理を行う。



図1 ミカンキイロアザミウマ



図2 キュウリの葉の白斑状の被害(矢印)



図3 アワユキセンダングサ